四季便り

The Garden of Medicinal Plants, Kinki University

ビ　ワ

学　　名　：　*Eriobotrya japonica*
生　薬　名　：　枇杷葉
薬用部位　：　葉
薬　　効　：　鎮咳・去痰・健胃

6月頃から黄橙色に熟すビワの実は、甘くみずみずしく、生食を主としてゼリー、ジャム、果実酒としても親しまれています。

「枇杷」の名の由来は、中国・北宋時代の本草書に記載されており、葉の形が楽器の「琵琶」に似ているので、ともに中国音でpiphaと呼び、のちに「枇杷」の字を当てたようですが、果実の形もまた琵琶に似ています。

学名の *Eriobotrya* は「*erion*（羊毛）と*botrys*（ブドウ）」の意で、柔らかな毛に覆われた果実が房状になることに由来します。

ビワはお釈迦様の時代から特別な木とされ、仏教の経典のひとつに、枝、葉、根、茎ともに優れた薬効があり、あらゆる病を治すので「大薬王樹」、ビワの葉は「病気という憂いを無くす扇形の葉」と言う意味で「無憂扇」と呼ぶと記されています。寺院にビワの木が多いのは、僧侶達が種々の病に多様に用いたからのようです。

9月上旬に採取した青々とした新鮮な葉の裏の毛を取り除いて乾燥したものが生薬「枇杷葉」です。成分としては、精油の他、クエン酸、ウルソール酸、青酸配糖体・アミグダリンなどが含有されています。鎮咳、去痰、健胃、利尿、消炎に用いられる他、民間ではあせもや湿疹などに煮出した湯で洗ったり、浴湯料としても用いられます。また、火で炙った葉を直接患部に貼ったり、生葉の上からお灸をする温圧療法も知られています。

江戸時代、京都の街頭で行商らが暑気払いや下痢止めに枇杷葉に藿香、我朮、呉茱萸など数種を加えた薬用茶「枇杷葉湯」を往来の人や旅人に売り歩く様子は、夏を告げる風物詩だったようです。